

松岡 辰雄（まつおか・たつお）

1、プロフィール

大正・昭和時代において、口語歌とプロレタリア短歌に特色を示した。労働運動に身を挺(てい)して活動し、弾圧を受けたが、病気と困窮のなかで作歌を続けた。

<生没>

1904(明治 37)年5月 15 日 ~ 1955(昭和 30)年8月 23 日

<代表作>

歌集『新生に題す』(昭和 21 年 11 月)「煉獄の歌」5首(『新万葉集』昭和 13 年)
遺歌集『松岡辰雄歌集』(昭和 42 年8月)

<青森との関わり>

青森に生まれ青森に没した。県歌壇において早く口語歌を作り、淡谷悠蔵の指導を受け「黎明」に拠った。プロレタリア歌人として秀作を残した。

2、作家解説

明治 37 年、青森市栄町に誕生。浦町高等小学校退学。17 歳、鉄道に勤務し文学に親しむ。翌年、沖仲仕の親分の父が破傷風で死に、辰雄が一家の支えとなった。

19 歳(大正 11 年)、作歌を始め淡谷悠蔵の指導を受け、同年「黎明」7月号に、松岡虚影の名で短歌が掲載された。8月号以降は、本名松岡辰雄となる。

当時の県文壇では、「文芸の社会化」論争があった。民衆の側に立ち「文芸の社会化」の必然性を主張した淡谷のもとで、口語歌的発想の資質をもっていた松岡は、口語歌、そしてプロレタリア短歌へと進み、「黎明」で活躍を示した。

21 歳、車掌の松岡は左眼に機関車の火の粉が入り視力を失い改札掛勤務となる。この際、国鉄の国鉄労働者に対する冷酷な態度が階級的自覚の動機となった。24 歳、青森駅長と口論し馘首(かくしゅ)され、西北地方の農民組合組織に

奔走した。昭和4年 26 歳、日本共産党入党。4. 16 事件で検挙された。27 歳、治安維持法違反で青森刑務所に収監された。獄中から「座標」に短歌を寄稿。肺を病み、病監の中で作歌を続けた。同9年 31 歳、仮出獄。「樹氷」その他で作歌活動をし、結婚し2児を得た。

昭和 13 年 35 歳、改造社刊行『新万葉集』に「煉獄の歌」5首が収録された。同年、文学報国隊の一員として北支へ派遣された。同 15 年 37 歳、同志らと共に反戦主義者に対する予防拘禁で検挙され、拷問を受け留置された。

その後、闘病生活に入る。昭和 30 年 51 歳で死去するまで、貧窮のなか短歌選者としても活動、川崎むつをと共に歌誌「標識灯」を発行した。昭和 21 年、「人民短歌」の渡辺順三の世話で歌集『新生に題す』が出版されたことは、特筆に値する。先進としての活動を高く仰ぎその死を悼む同志たちが、遺歌集を出版し歌碑を建立した。

雨しぶく牢の格子につかまって、見上げる空の昼の稲妻(昭和5年)

血を喀きし病床に聞く治維法の撤廃は嗚呼悲しみに似る(昭和 20 年)

3、資料紹介

○「松岡辰雄歌碑」

歌碑

1971(昭和 46)年8月 23 日建立

青森市浅虫、旧水族館へ入る海沿いの道の右側松林に「飢うるともこの信念にそむかざれ今あかあかと燃ゆる夕空」と、命日に建立した歌碑が建つ。〈全日本鉄道従業員組合運動に起つ〉と題した大正 11 年の作。盆に線香が手向けられ、今なお追慕されている。

○『松岡辰雄歌集』

図書

1967(昭和 42)年8月 20 日

145mm×191mm

松岡を敬愛する同志・歌人等が、その死後 12 年に刊行した。遺歌数 1800 首から約 590 首、詩 1 と歌論 1、思い出の他に、大沢久明が序文、淡谷悠蔵が「朽ちない墓標」を寄せている。「原爆にナパーム弾に灼かれたる亜細亜の悲しみ胸こみあぐる(昭和 29 年)」